

新着図書案内



明治大正史 世相篇 新装版：世相篇

柳田 國男【著】 文春新書 1993/7 請求記号159.8

毎日われわれの眼前に出ては消える事実のみによって、立派に歴史は書けるものだという著者が、明治大正の日本人の暮し方、生き方を、民俗学的方法によって描き出した画期的な世相史。著者は故意に固有名詞を掲げること避け、国に遍満する常人という人々が眼を開き耳を傾ければ視聴しうるもののかぎり、そうしてただ少しく心を潜めるならば、必ず思い至るであろうところの意見だけを述べたという。



君の唇に色あせぬ言葉を

阿久 悠【著】 河出書房新社 2018/8 請求記号210.75

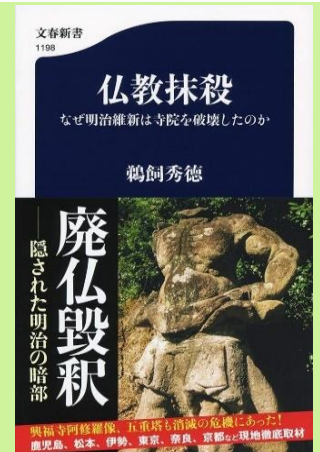
時代を超え、人々の心に深く刻まれる阿久悠の言葉には、未来への希望が溢れている。人生に悩める全ての人に捧ぐ、感動の箴言集。



境界を生きる 性と生のはざままで

毎日新聞「境界を生きる」取材班【著】 春秋社 2015/6 請求記号182.1

わたしは男？ それとも女？
「性分化疾患」と「性同一性障害」。
男と女、生まれたときに性別は決まっている——そう疑わない社会で、誰にも言えない苦しみを抱える当事者たち。苦悩する医療関係者、そして現実の壁。人間の根源に迫った新聞報道の金字塔が、ついに書籍化。生まれたときに性別は決まっていると疑わない社会で、誰にも言えない苦しみを抱え込む「性分化疾患」「性同一性障害」の当事者と家族に取材し、その姿を伝える。



仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか

鶴飼 秀徳【著】 文藝春秋 2018/12 請求記号182.8

文明開化の明治にも光と影がある。その影の部分象徴するのが「廃仏毀釈」である。もともとは神仏習合状態にあった神社と寺院、神と仏を分離する政策だったが、寺院、仏像などの破壊から、暴動にエスカレート。完全に仏教を殲滅してしまった地域もあった。日本史上でも例が少ない大規模な宗教への攻撃、文化財の破壊はなぜ行なわれたのか？自らも僧侶である著者が、京都、奈良、鹿児島、宮崎、長野、岐阜、伊勢、東京など日本各地に足を運び、廃仏毀釈の実態に迫った近代史ルポ。百五十年のときを経て、歴史が甦る！

妻と娘二人が選んだ
「吉野弘の詩」



吉野弘

青土社

妻と娘二人が選んだ「吉野弘の詩」

吉野 弘【著】

青土社 2015/4

請求記号911.56

その詩人の訃報が各種メディアに大きく取り上げられ、一周忌を前に放映されたテレビ番組が日本を揺さぶり、改めて読者の心を奪った。NHKクローズアップ現代で取り上げられた「祝婚歌」「虹の足」「生命は」「夕焼け」を収録。二人が睦まじくいるためには愚かであるほうがいい…日常生活のさまざまを凝視し、大きな感動を生む吉野作品世界からの、ベスト・セレクション。

新美南吉
童話集



角川春樹事務所

新美南吉童話集

新美南吉【著】

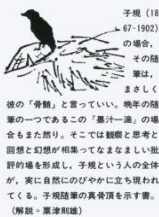
角川春樹事務所 2006/1

請求記号913.6

いたずら好きの小ぎつね“ごん”と兵十の心の交流を描いた「ごん狐」、ある日、背中の殻のなかに悲しみがいっぱい詰まっていることに気づいてしまった「でんでんむしの かなしみ」など、子どもから大人まで愉しめる全20話を収録した、胸がいっぱいになる名作アンソロジー。

墨汁一滴

正岡子規著



巻 13-4
岩波文庫

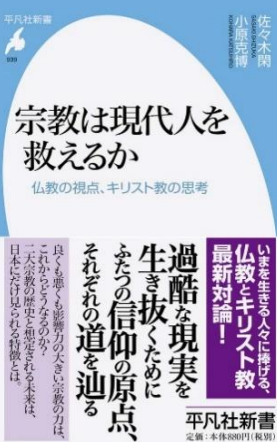
墨汁一滴

正岡 子規【著】

岩波書店 1984/3

請求記号914.6

明治三四年、子規三五歳。重い肺結核の症状に喘ぎながら、『松蘿玉液』に続き、新聞『日本』に連載（一・一六一七・三）した随筆集。多様多彩なテーマが、みずみずしくユーモアにあふれた筆致で綴られ、子規の精神に広がり深さが鮮やかに立ち現れる。近代文学の巨星=子規が随筆家としての真骨頂を発揮した書。



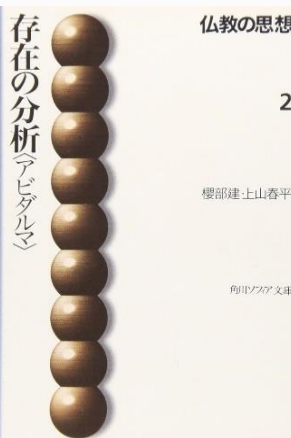
宗教は現代人を救えるか

佐々木 閑, 小原 克博【著】

平凡社 2020/4

請求記号180

宗教はひとびとの心の中に存在する。そして、政治・社会・経済に多大な影響を与えてきた。いま、テクノロジーが人間の思考を規定しかねないほどIT社会が発達しつつあり、環境問題など喫緊の課題も取り沙汰されるなかで、仏教とキリスト教という二大宗教の教義と歴史、これを信じる人々の思考を深く知ることにより、物質世界の変化・進化への対処法が、より確実にわかるだろう。激動する世界に生きるわたしたちを、宗教はこれからも導いてくれるのだろうか。二人の専門家が徹底的に語る「現代宗教対論」。



仏教の思想 2 存在の分析<アビダルマ>

上山 春平【著】, 櫻部 建【著】

KADOKAWA 1996/10

請求記号183.92

ブッダが説いた「ダルマ」(法・真理)を解釈して仕上げられ、ブッダ出現以来、1000年の間にインドで展開された仏教思想の流れを読み解く鍵となる壮大な思想体系、「アビダルマ」。ブッダの没後、数世紀を経てインド諸学派ごとに体系化された数々のアビダルマの教義の中から、西暦400年前後に活躍した仏教史上最大の思想家、ヴァスバンドゥ(世親)の『アビダルマ・コーシャ』を取り上げ、仏教思想の哲学的側面を根源から捉え直す。